

日本における台湾出身者の日本イメージ

——日本語上級話者を対象に——

田中 詩子・岡村 郁子・加賀美 常美代

1. 研究背景と研究目的

昨今、日本と台湾との相互の関係はますます深まっている。経済的關係では、日本は台湾にとって第2位の貿易パートナー国であり、台湾は日本にとって第5位の貿易パートナー国である（アジア大洋州局, 2014）。人的往来においても、2013年の台湾から日本への短期訪問者数は2,210,800人に上り過去最高を記録しており、日本から台湾への短期訪問者数も1,421,550人となっている（アジア大洋州局, 2014）。また、台湾からの留学生数を見ると、2013年度は4,719人で、中国、韓国、ベトナムに次いで4番目に多い（日本学生支援機構, 2014）。さらに、2013年に交流協会が実施した台湾における対日世論調査によると、日本に対するイメージは、マイナスイメージしかない人はわずか2%、親しみを感じる65%・感じない15%で、最も好きな国では43%を占め第1位となっている（交流協会, 2013）。一方、中国と韓国の日本に対する印象を調査した日中韓共同世論調査（読売新聞, 2007）によると、中国では非常に良い印象とどちらかという和良好的印象を合わせて15.7%、非常に悪い印象とどちらかという悪い印象を合わせて82.9%であった。また、韓国では非常に良い印象とどちらかという和良好的印象を合わせて35.6%、非常に悪い印象とどちらかという悪い印象を合わせて63.6%となっている。ここからは、台湾における親日的イメージの割合が非常に高いことがわかる。

篠原（2003）は台湾の大学生を対象に調査を行った結果、日本に対する肯定的イメージは8割以上であり、親日派が多いとしている。このような日本イメージには日本の大衆文化の影響が大きいとの指摘があり（甲斐, 1995; 篠原, 2003; 李, 2006）、90年以降に沸き起こった日本ブームは「哈日族」と呼ばれる若者を中心とした熱狂的な日本好きを生み出している。日本の恋愛ドラマと日本イメージの関係について調査した李（2006）は、台湾で日本の恋愛ドラマを視聴する人々はドラマの中で表現されたファッションや都会のイメージ、現代的な生活を「日本」と結びつけ「日本＝発展の指標」というイメージを形成していると指摘している。

加賀美・守谷・楊・堀切（2013）は、台湾の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に発達段階別の日本イメージを明らかにするため、九分割統合絵画法を用いて描画収集を行い分析した。その結果、『観光』『大衆文化』『食文化』『伝統文化』など14のカテゴリーが抽出され、イメージ別比較では中立47.6%・肯定47%・否定3.6%であった。また、中立的イメージと肯定的イメージについては小学生・中学生・高校生・大学生別にみても、それぞれが90%以上を占めており小学生からすでに肯定的イメージが形成されていることや、否定的イメージについては小学生・中学生は少なく高校生・大学生で多くなる傾向であることが

示されたとしている。

一方、日本在住の台湾出身者を対象とした守谷・加賀美・楊（2013）は、東京とその近郊に居住する台湾出身の20代および30代の留学生と社会人男女9名を対象にインタビュー調査を行い、家庭環境や日本の大衆文化との接触および歴史教育の影響が日本イメージ形成にどのように関連するか検討している。この研究では、来日前に日本や日本人に対し「礼儀正しい」「規則を守る」などのイメージを所持していたが、来日後の日本人との接触体験の中で「日本人は冷たい」「差別的である」などと強く感じ、日本イメージが低下したという調査対象者の言及が示されているものの、詳細な検討は行われていない。李（2006）は、短期旅行者を対象に台湾で抱いていた親日的なイメージと現実の日本との間でギャップが生じる可能性について検討した結果、短期観光のため調査対象者からは大きなギャップは示されなかったと報告している。しかしながら、短期旅行者と日本に長期間滞在する留学生や社会人とは日本での経験が大きく異なると考えられる。そこで、台湾における調査（篠原，2003；加賀美・守谷・楊・堀切，2013）では肯定的な日本イメージが多く示された台湾出身者が、来日後、どのような日本イメージを形成しているか検討する必要があると考える。

来日後の日本イメージの研究としては、留学生を対象としたものがいくつかみられる。岩男・萩原（1988）では、日本各地の大学に在学する留学生1,301名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、来日してから日本イメージが変化したという回答は65%であった。特に日本人との人間関係に関する側面でのイメージが変化したという回答の割合が高く、その内容を詳しくみると、プラスよりもマイナスの方向への変化が多いことが示されたとしている。

中国人留学生を対象に来日後の対日観とその要因を調査した研究に鄭（2009）がある。この研究では、日本の全体的なイメージについて「良くも悪くもない」と答えた人が58%、「良いイメージ」と答えた人が40%、「悪いイメージ」と答えた人はわずか2%であり、そのような対日観が生じた要因としては来日後の日本人との交流をあげた人が最も多いとしている。また、中国における日本留学の経験者を対象にした劉（1998）では、「日本」に対して「好き」と答えた人は63%で、「留学前より好きになった」という人は6割に達しているものの、「日本人」に対して「好き」と答えた人は37%で、「留学前より好きになった」という人は3割にとどまり、留学により日本人が嫌いになったという人は1割以上であるという調査結果であった。

日本における韓国人留学生を対象に調査した加賀美ら（2013）では、肯定的イメージが50%、否定的イメージが40%、中立的イメージが6%という結果が示されている。一方、韓国の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に九分割統合絵画法を用いて発達段階別の日本イメージを明らかにした研究に加賀美・守谷・岩井・朴・沈（2013）がある。この研究の大学生の結果をみると、肯定的イメージが21%、否定的イメージが31%、中立的イメージが46%となっている。これらの研究を一律に比較はできないものの、日本における韓国人留学生の肯定的イメージは韓国在住の大学生の2倍以上となっており、日本で実際に生活することで肯定的イメージが付加されていく可能性があるといえる。

このように、留学生を対象にした研究からは、実際の日本での生活による体験や日本人との接触が来日後の日本イメージに影響を与えていることが考えられる。つまり、日本での現実の交流体験、個人的接触や接点により得られた情報が、現実的な日本イメージ形成に影響を与える可能性（加賀美・堀切・守谷・楊，2003）があるといえよう。しかしながら、日本における台湾出身者に焦点を当てた日本イメージの研究はこれまでのところ見られない。中国、韓国とは異なる台湾の親日的なイメージには、恋愛ドラマをはじめ日本の大衆文化の影響が大きい（甲斐，1995；篠原，2003；李，2006）との指摘がある。そのため、台

湾で抱いていた「憧れの国」日本と現実の日本との差は実際以上に大きく感じられ、台湾出身者が日本滞在経験により特有の日本イメージを形成することが予測される。

さらに、日本での所属や立場の違いについて検討した研究もある。先述の中国における劉（1998）の調査では、日本での立場が大学生であった場合は「日本人」が好きと答えた人は52%で、嫌いと答えた人より27%多いのに対して、日本語学校生であった場合は「日本人」が嫌いと答えた人は34%で、好きと答えた人より1割多い結果となっている。この結果について劉（1998）は、日本語学校生のほうが日本での生活環境が厳しく差別を受けることも多いことを理由としてあげている。また、中国人留学生を対象に調査した黄（2013）は、日本語学校生と大学生では学習環境や日本人との接触頻度、接触機会、接触相手などさまざまな面で異なっていると述べている。このように、日本における所属や立場の相違により日本での経験や接する人々が異なるため、日本イメージの形成に差異が生じることが予測され、台湾出身者についても検討の必要がある。

以上を踏まえ、本研究では日本に在住する台湾出身日本語上級話者の日本イメージはどのようなものかを明らかにし、さらに所属や立場により日本イメージがどのように異なるかを検討することを目的として、次の研究課題2点を設定する。

研究課題1：日本における台湾出身者の日本イメージはどのようなものか。

研究課題2：日本における台湾出身者の日本イメージは日本での所属や立場の相違によりどのように異なるか。

2. 調査対象者と研究方法

2012年11月下旬から12月上旬に東京および東京近郊に居住する台湾出身者に面接調査を行った。対象者は【表1】のとおり12名であった。年齢は20歳から31歳で、男性4名・女性8名、交換留学生（学部生）3名・大学院生5名・社会人4名であった。日本語学習歴は1年から8年と幅が見られたが、全員が日本語上級レベルで、12人中11人が日本語能力試験1級あるいはN1を取得していた。日本滞在期間は交換留学生（学部生）が3か月、大学院生が2年半から3年半、社会人が3年から8年であった。

まず、対象者に心理学の手法である20答法（Kuhn & McPartland, 1954）による日本イメージの記入を依頼した。具体的には、「私は、日本を（ブランク）と思います。」という文が20個書かれた調査用紙の各ブランク部分へ日本の印象や日本に対する思いなどを自由に記述するよう求めた。その結果、20個すべて記入した者は10名、16個が1名、8個が1名であった。各回答に基づき、その背景や理由などについて聞き取りを行うため1対1の面接調査を実施した。1人当たりの面接時間は40分～2時間程度であった。

以上の面接調査の結果、224例の回答が得られた。これらを分析対象とし、KJ法（川喜田, 1967）におけるグループ分けの手法を使って分類を行った。1つの回答内に2つ以上の意味を含むものは意味ごとの単位に分けて分析した。そのような例が2例あったため、分析後は226例となった。全データをグループ化し、最終的にそれぞれのグループを肯定・否定・中立のイメージ別に分類する際には、著者3名に異文化教育を専門とする研究協力者5名を加えて妥当性に関する検討を重ねた。

【表1】 調査対象者の属性

	年齢	性別	所属・立場	滞在期間	日本語 学習歴	日本語 レベル	帰国予定	20答法 回答数
A	20	男	学部3年	3か月	2年	上級 (N1)	あり (交換留学生)	8
B	21	男	学部3年	3か月	3年	上級 (N1)	あり (交換留学生)	16
C	23	男	学部4年	3か月	1年	上級 (N1)	あり (交換留学生)	20
D	27	女	M2	2年半	3年半	上級 (1級)	未定	20
E	27	男	M2	2年半	2年	上級 (1級)	未定	20
F	25	女	M2	3年	8年	上級 (1級)	未定	20
G	29	女	D2	3年半	7年	上級 (1級)	未定	20
H	29	女	D3	2年半	5年	上級 (1級)	未定	20
I	27	女	社会人	3年	4年	上級 (1級)	未定	20
J	29	女	社会人	4年	3年	上級	未定	20
K	27	女	社会人	7年	4年	上級 (1級)	未定	20
L	31	女	社会人	8年	7年	上級 (1級)	未定	20

注) Mは大学院修士課程、Dは大学院博士課程を意味する。

3. 結果と考察

3.1 日本における台湾出身者の日本イメージはどのようなものか (研究課題1)

3.1.1 日本イメージのカテゴリー化

上述のとおり得られた全226例のデータを分類した結果、【表2】の14の大カテゴリーが生成された。『日本社会・日本人気質への好意的理解』が38例、『日本社会・日本人気質への違和感』が36例と多く、次いで『社会的環境整備』が21例、『人間関係困難』と『過度の自己抑制』が各16例と続く結果となった。個人的内容や分類できないものをまとめて『不詳』(7例)とした。カテゴリー定義を【表3】に示す。

3.1.2 肯定・否定・中立のイメージ別比較

続いて、3.1.1で得られた14のカテゴリーを肯定・否定・中立のイメージに分類した。その結果、【表4】および【図1】のとおり、肯定的イメージの7カテゴリーが105例、否定的イメージの6カテゴリーが101例、中立的イメージの1カテゴリーが12例となった。また【図2】のとおり、肯定的イメージは47%、否定的イメージは45%で、同程度であることが示された。中立的イメージは5%であった。

3.1.3 本対象者の日本イメージの特徴

本対象者の日本イメージのうち、肯定的なイメージを表すカテゴリーは7つであった。他者への配慮や礼儀を重視すること、勤勉であることなどに対して好意的に理解していることを示す『日本社会・日本人気質への好意的理解』、街の清潔さや生活利便性、都市整備が充実していることへのイメージを示す『社会的環境整備』、アニメ・漫画大国であることやおしゃれへの関心が高いことへの好意的イメージである『大衆文化の豊かさ』、科学技術の先進性や日本製品の豊かさに対する『経済・産業の発展』、伝統文化を保護していることや伝統精神を継承していることに対する肯定的イメージを示す『伝統の継承重視』、グループ行動を尊重し仲間との関係を重視することへの好意的イメージである『人間関係重視』、食べ物の

【表2】 台湾出身者の日本イメージ

	カテゴリー名	数
1	日本社会・日本人気質への好意的理解	38
2	日本社会・日本人気質への違和感	36
3	社会的環境整備	21
4	人間関係困難	16
5	過度の自己抑制	16
6	現代社会事情	15
7	大衆文化の豊かさ	14
8	経済・産業の発展	12
9	地理・自然環境	12
10	伝統の継承重視	10
11	生活困難	10
12	飲食文化への違和感	8
13	人間関係重視	6
14	食文化の豊かさ	5
—	不詳	7
	計	226

おいしさなどを示す『食文化の豊かさ』である。

一方、否定的なイメージを表すカテゴリーは6つであった。過度に礼儀や形式を重視し規則を遵守すること、政治への関心が希薄であることなどへの違和感を示す『日本社会・日本人気質への違和感』、本音のわかりにくさや上下関係の厳しさによる人間関係構築の困難さを示す『人間関係困難』、世間体による束縛や過度に自己表出を抑制していることに対する不可解さを示す『過度の自己抑制』、現代の日本社会がストレス社会や格差社会であること、自殺が頻発していることなどの社会問題に対するイメージである『現代社会事情』、生活費の高さや交通の不便さを感じていることを示す『生活困難』、飲食スタイルや食文化に違和感を抱いていることを示すイメージである『飲食文化への違和感』である。

以上の結果より、本対象者の日本イメージについては、『日本社会・日本人気質への好意的理解』と『日本社会・日本人気質への違和感』、『人間関係重視』と『人間関係困難』、『食文化の豊かさ』と『飲食文化への違和感』というそれぞれ対になるカテゴリーが抽出され、日本社会や日本人気質、人間関係、日本の食文化に対して肯定・否定の相反するイメージが示されたことが特徴としてあげられる。また、イメージ別比較では、肯定的イメージと否定的イメージの割合が同程度であり、インタビューにおいては、「最初は接客やサービスはすごいなって、すごく礼儀正しいなと思った。完全に慣れたら、逆に礼儀正しいのと反対に、他の人を気にしすぎると。だから、いいところもあるし、気にしすぎるところもあると思った」「いろいろな意味で無駄が多い。メールも『いつもお世話になっております』とか挨拶文がすごく長い。最初なじめないときには長いなと思って。でも、そういうところが日本人の丁寧さも表している」などの語りがみられた。ここからは、肯定的イメージと否定的イメージを同程度に併せ持つ日本イメージが形成されていることが考えられる。

上述のとおり、本研究の肯定的イメージと否定的イメージの割合は同程度であったが、否定的イメージについては、加賀美・守谷・楊・堀切（2013）による台湾での調査結果ではわずか3.6%であったのに対し、

【表3】 カテゴリー定義および具体例

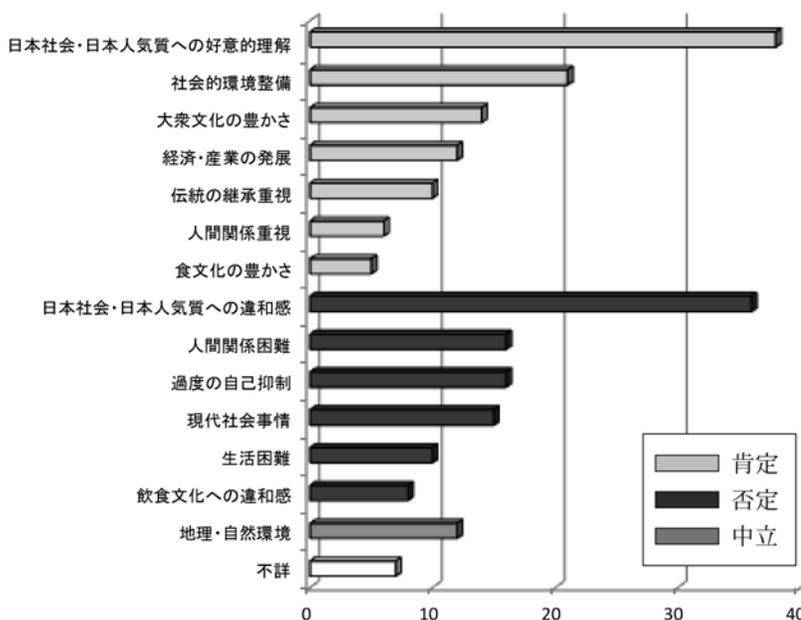
	カテゴリー名	定義	具体例
1	日本社会・日本人気質への好意的理解	日本人の好ましい行動や態度、日本の社会システムなどの長所を表すもの	親切だ、責任感が強い、礼儀正しい人が多い
2	日本社会・日本人気質への違和感	日本の社会システム、行動規範、生活スタイルや日本人気質への違和感や理解しがたさを表すもの	時間に厳しい、形式を重視、政治に無関心な人が多い
3	社会的環境整備	街の清潔さや利便性など社会的な環境が整備されていることを表すもの	街がきれい、空気がきれい、交通が便利、治安がいい
4	人間関係困難	人間関係における距離の測りにくさによる人間関係構築の困難さを表すもの	本音がわからない、上下関係が厳しい、冷たい
5	過度の自己抑制	世間体による束縛や、自分の意見・感情を過度に抑制することへの理解しがたさを表すもの	他人の目を気にしすぎる、遠慮しすぎる、意見を言わない
6	現代社会事情	現代の日本社会が抱える問題・事象や現代の日本の否定的な風潮、グローバル化の遅れを表すもの	ストレスがたまる、格差社会、自殺が多い
7	大衆文化の豊かさ	日本のアニメや漫画、ファッションなどの大衆文化に関わるもの	漫画・アニメ大国、ファッションや流行に敏感、おしゃれ好き
8	経済・産業の発展	経済、産業面での日本の発展を表すもの	先端的な科学技術を持っている、観光産業が発達、ものの質がいい
9	地理・自然環境	日本の自然条件や、地形・人口などの地理的特徴に関わるもの	四季の風景がきれい、島国、天災が多い
10	伝統の継承重視	文化財や祭り、匠の技など伝統の継承を重視することを表すもの	伝統文化を重視、歴史のある国、侍精神
11	生活困難	日本での生活しにくさを表すもの	物価が高い、交通費が高い、電車が混雑する
12	飲食文化への違和感	日本の飲食スタイルや食文化への違和感を表すもの	食事の量が少ない、果物の種類が少ない、お酒を飲み過ぎる
13	人間関係重視	日本人が家族や友人・サークルの仲間などとのつながりを重視することを表すもの	仲間を重視している、絆が大切
14	食文化の豊かさ	日本の食べ物の特徴を表すもの	お米がおいしい、刺身がおいしい
—	不詳	日本との関連が不明なもの、個別性が強く一般化しにくいと判断されたもの	

本研究では45%であった。この結果から、台湾で見ていた「最も好きな国」「憧れの国」日本と、実際に住んでみた現実の日本との間にギャップが生じていることが示されたといえる。

このように来日後生じたと考えられる否定的イメージの特徴的なものとしては、『日本社会・日本人気質への違和感』『人間関係困難』『過度の自己抑制』『飲食文化への違和感』の各カテゴリーがあげられる。カテゴリーごとに詳細をみると、まず『日本社会・日本人気質への違和感』では規則遵守の厳しさに対する語りが多くみられた。台湾では時間や規則などに関して比較のおおらかなとらえ方をしているため、「ルールとか規則とか、もう煩わしい」というように息苦しさを感じている様子が見えがえた。また、「なんでそんなに形式を大事にするの」などと語り、形式を偏重することに違和感を抱いている者もいた。しかしながら、日本で生活していく上では台湾とは異なる日本社会や日本人気質に合わせていかなければならないと考えており、「日本人の振る舞いを見て合わせるようにしますけど、ストレスがたまりやすい」というように、日々の生活で少なからずストレスを感じていることも語られた。さらに、本研究では面接調査の時期が2012年12月16日に施行された第46回衆議院議員総選挙の直前であったことから、政治に対する関心の低さについての言及が多かったことも特徴的であろう。台湾では政治について日常的によく話

【表4】 イメージ別比較（カテゴリー）

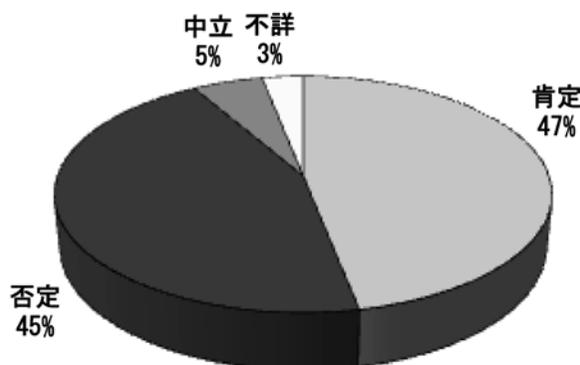
カテゴリー名	数	イメージ別合計
日本社会・日本人気質への好意的理解	38	肯定(105)
社会的環境整備	21	
大衆文化の豊かさ	14	
経済・産業の発展	12	
伝統の継承重視	10	
人間関係重視	6	
食文化の豊かさ	5	
日本社会・日本人気質への違和感	36	否定(101)
人間関係困難	16	
過度の自己抑制	16	
現代社会事情	15	
生活困難	10	
飲食文化への違和感	8	
地理・自然環境	12	中立(12)
不詳	7	不詳(7)
計	226	



【図1】 イメージ別比較（カテゴリー）

し合わせ、特に選挙期間中は熱い議論がいたる所で行われているという。しかし、日本では選挙が近いにもかかわらず、人々の関心が薄く、周りの人が議論を戦わせることもなく静かに過ごしていることが理解しがたい様子であった。

次に、『人間関係困難』では「本音がわからない」「表面的だ」などの否定的なイメージが示された。台



【図2】 イメージ別比較

湾では本音でのつきあいが多いのに対し、日本人は表面上礼儀正しく接していても本当の気持ちがわからないと感じていることが多く語られた。例えば、以前アルバイト先で「大丈夫。全然気にしていない」という相手の言葉を信じていたにもかかわらず、他の人には自分に対する文句や不満を言っていたという不快な経験をしたと語る者もいた。インタビューデータからは、日本には人間関係における暗黙のルールがあるが、そのルールがわからず戸惑うことがある様子や、日本人は「友人なのに遠慮する」ことに違和感を抱き、日本人との友人関係構築に困難を感じている様子が見えられた。

さらに、『過度の自己抑制』におけるインタビューデータを見ると、台湾人は他者とは異なる独自性を好み、積極的に自己主張をする傾向にあるのに対して、日本人は世間体に縛られ、過度に自己を抑制しているというイメージであることが語られている。「台湾では何をやるにも、絶対人と違うことをやりたい人が多いのとは逆に、日本では人とはちょっと違う言動でも結構みんな避ける」「台湾では人と違うこと、自分は特別だと表現したい。日本は学校で使う物、ランドセルや文房具がだいたい一緒で、みんなと違ったら、極端な話になるといじめられる。それはおかしいと思う」などの語りからは、日本人が集団の中でできるだけ目立たないようにすることに対して理解できず、違和感を覚えていることがうかがえる。また、会議やディスカッションでは誰も意見を言わずに時間が過ぎていくことに困惑し、「意見があるならちゃんと発言の方がいい」と述べる者や、「大変なときでも自分の感情をはっきり言わないのはストレスがたまりそう」などと言及する者もあり、自分の意見や感情を過度に抑制している日本人に違和感を抱いていることが示された。

最後に、『飲食文化への違和感』では、「レストランなどで一人前の量が少ないことに驚いた」「果物の種類が少ない」「調味料の種類が少なく料理の味が単調だ」などの語りから、台湾での食生活と比較して物足りなさを感じていることがわかる。「バナナを1本単位で売っているのが不思議だ」などという細かい気づきも述べられており、日々の食生活に違和感を抱いていることがうかがえる。食に関するだけでなく、日本人の酒好きについての言及も多くみられた。台湾では仕事の付き合いなどで多量に酒を飲む習慣がないことから、飲み会などにおける酒を通じての人間関係構築や、飲酒過多により駅や電車の中で公共マナーを逸脱する行為に対して違和感を覚える結果となったのではないかと推察される。また、台湾出身者の食への関心の高さや日本と台湾の飲食スタイルの相違が、このようなイメージにつながったものと思われる。

以上の結果を台湾で小学生から大学生までを対象に行った日本イメージ調査（加賀美・守谷・楊・堀切、

2013)と比較すると、肯定的イメージについては、台湾での調査結果は47.6%で、本研究が47%となっており同程度であることが示された。それぞれの肯定的カテゴリーをみると、加賀美ら(2013)では『観光』『大衆文化』『先進国』『親近感・接点』の4カテゴリー、本研究では『日本社会・日本人気質への好意的理解』『社会的環境整備』『大衆文化の豊かさ』『経済・産業の発展』『伝統の継承重視』『人間関係重視』『食文化の豊かさ』の7カテゴリーとなっている。この中で両者に共通するものとして日本社会や日本人、大衆文化、経済・産業に関するカテゴリーがあり、相違点としては日本の社会的環境や食文化、伝統の継承、人間関係に関するカテゴリーがある。以下では、各カテゴリーの詳細をみる。加賀美ら(2013)の調査で示された『観光』については、本対象者が日本在住の生活者であるため、あまり意識されなかったことが推測できる。共通するカテゴリーとしては、加賀美ら(2013)の『大衆文化』は「メディアの影響を受けた流行や娯楽に関するもの」と定義されており、本研究の『大衆文化の豊かさ』と多くの下位カテゴリーで重なると考えられる。また、『先進国』についても「先端技術や経済・産業面での日本の先進性を表すもの」と定義されており、本研究の『経済・産業の発展』と下位カテゴリーで重なりがみられる。さらに、『親近感・接点』では下位カテゴリーに「お辞儀」や「礼儀正しい」などがあり、本研究の『日本社会・日本人気質への好意的理解』にもみられる内容であった。ここからは、台湾で抱いていた親日的なイメージがある程度維持されている可能性が考えられる。

このように台湾での調査(加賀美ら, 2013)と共通のカテゴリーが示された一方で、本研究では『社会的環境整備』『伝統の継承重視』『人間関係重視』『食文化の豊かさ』の各カテゴリーが抽出された。カテゴリー別にみると、『社会的環境整備』では「電車がいつも定刻に到着する」など、また『伝統の継承重視』では「着物を着ている人をよく見る」などの滞日生活における気づきが語られていた。さらに、『人間関係重視』では大学のサークル活動などの経験、『食文化の豊かさ』では「お米がおいしい」「刺身が新鮮でおいしい」など実際に食べておいしかった日本食について多く語られていた。つまり、これら4つのカテゴリーについては、来日後の日常生活の中で実体験を伴って形成された肯定的イメージであると考えられる。したがって、肯定的イメージには来日前から抱いていた親日的イメージと来日後形成されたイメージが混在していると言えよう。

以上のように、本研究の対象者である日本に在住する台湾出身者は、台湾で抱いていた親日的イメージをある程度維持しつつ、滞日生活で抱いた好意的理解とさまざまな違和感により新たに肯定的イメージと否定的イメージを形成していることが示された。その結果、『日本社会・日本人気質への好意的理解』と『日本社会・日本人気質への違和感』などのように肯定・否定の相反するイメージを抱きつつ日本イメージを形成しているものと考えられる。

3.2 日本における台湾出身者の日本イメージは日本での所属や立場の相違によりどのように異なるか (研究課題2)

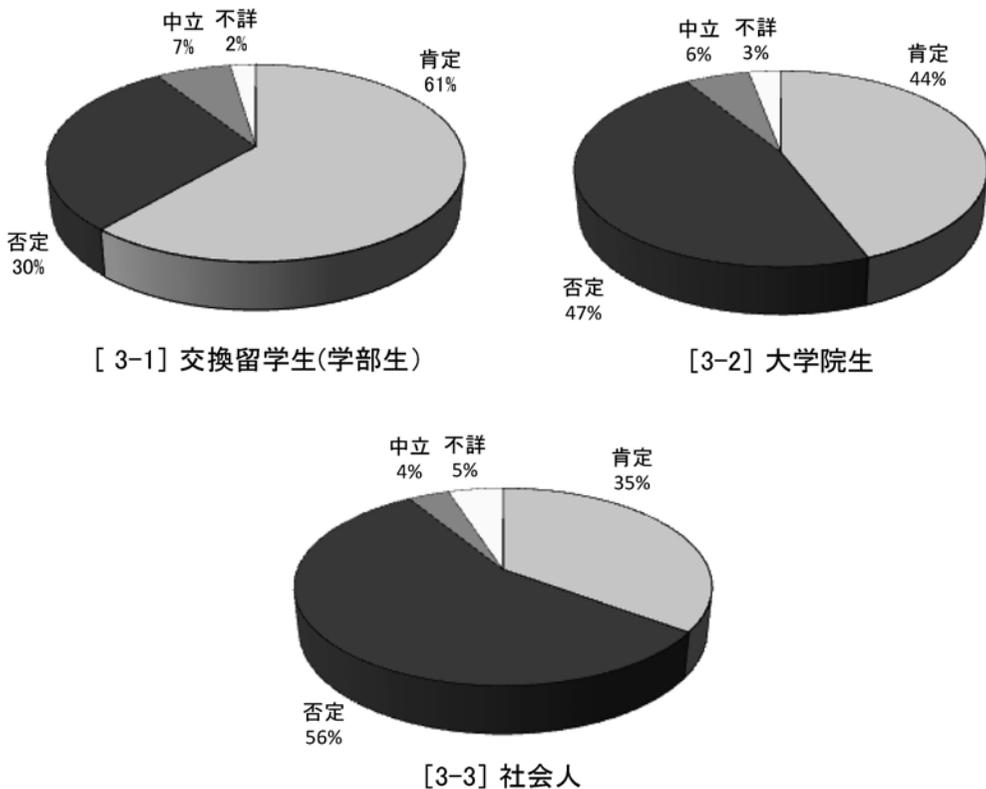
ここでは、3.1の結果で得られた日本に在住する台湾出身者の日本イメージが、対象者の日本での所属や立場の相違によりどのように異なるかを検討する。来日後、大学学部生・大学院生、社会人など、それぞれの所属や立場によって、日本社会への参入度合いや日本人との交流密度などが異なると考えられる。そのような経験の相違は、対象者の日本イメージにどのような影響をもたらすのだろうか。以下では、本対象者を交換留学生(学部生)・大学院生・社会人の3群に分類して分析した結果について述べる。

3.2.1 3群の肯定・否定・中立のイメージ別比較

対象者A, B, Cの3名は交換留学生(学部生)、D, E, F, G, Hの5名は大学院生、I, J, K, Lの4名は社会人である。全226例のデータを3群に分類し、さらに各群のデータを肯定・否定・中立のイメージ別に分類した。結果を【図3】に示す。 χ^2 検定を行った結果、イメージ間の度数は交換留学生(学部生)・大学院生・社会人で有意に異なっていた($\chi^2=16.10$, $df=4$, $p<.01$)。所属・立場別にみると、【図3】[3-1]に示すとおり、交換留学生(学部生)は肯定的イメージが61%、否定的イメージが30%で、肯定的イメージが否定のほぼ2倍であった。また【図3】[3-2]にみるとおり、大学院生は肯定的イメージが44%、否定的イメージが47%で、肯定と否定がほぼ同程度であった。さらに【図3】[3-3]のとおり、社会人は肯定的イメージが35%、否定的イメージが56%で、否定的イメージが肯定的イメージより約20%多い結果となった。

3.2.2 3群のカテゴリー別比較

続いて、3群それぞれの日本イメージについて、カテゴリー別の比較を行った。結果を【図4】に示す。まず、【図4】[4-1]のとおり、交換留学生(学部生)では肯定的イメージに分類されたカテゴリーが全体に多く、『日本社会・日本人気質への好意的理解』と『経済・産業の発展』が同数、次いで『大衆文化の豊かさ』『伝統の継承重視』『食文化の豊かさ』『人間関係重視』と続く結果となった。一方、否定的

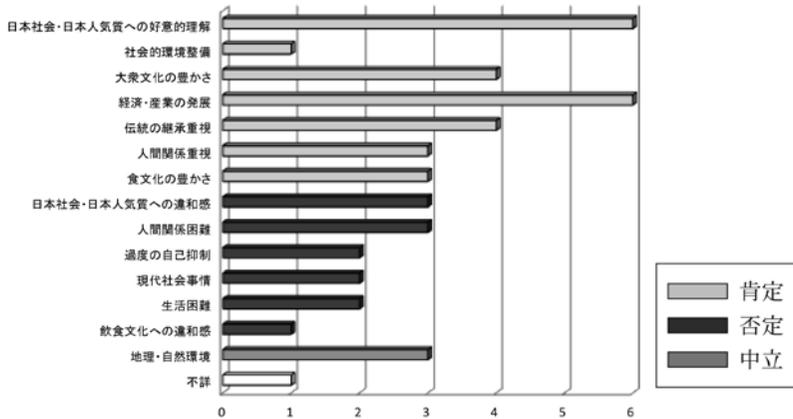


【図3】 3群のイメージ別比較

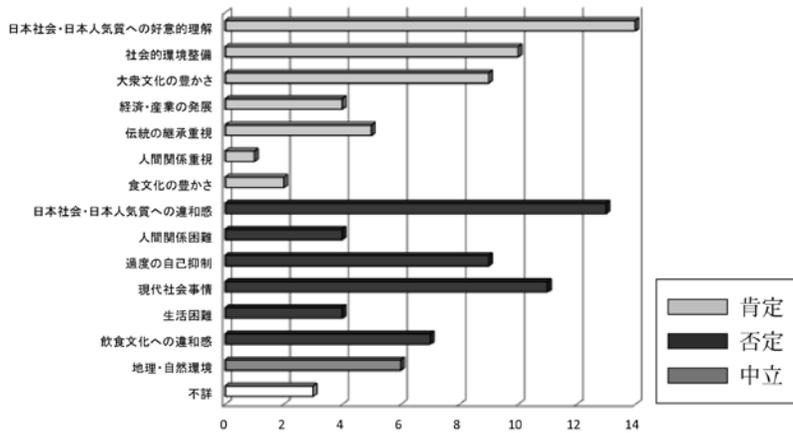
イメージの中で多くみられたカテゴリーは『人間関係困難』と『日本社会・日本人気質への違和感』であった。本調査の交換留学生（学部生）は来日して3か月程度であり、まだ日本への参入度合いが高くない。年齢も21歳～23歳と若く、街のきれいさや住みやすさ、IT産業の先進性などへの好意的な日本イメージについての言及が多くみられた。また、デパートなどでのサービスについては、「お母さんとデパートで買い物したら、その袋を持って『そのエレベーターの前でお渡しします』とか言って。渡したら礼をして、そのまま立って、エレベーターが閉まるまでお辞儀をしていて、びっくりして」というように、行き届いた日本のサービスに驚きを覚えたと言語する者もいた。その一方で、短い滞日期間ではあっても、「日本は建前が大切な国。サークルの中の隠されたルール。まるで小さいタテ社会みたいな」「（日本人は）敬語とかも使ってきますし、いろいろ言ってくるんですが、実際は（外国人には）冷たい人が多いんです」という語りにもみられるように、すでに日本での学生生活を通じて感じた日本人の本音と建前、日本人集団の閉鎖性や排他性、部活動などを通じて認識した厳しい上下関係についての言及もみられた。さらに、「（日本人は）英語がうまくなりたいのになれない」という日本のグローバル化の遅れに対する批判の目も持っており、交換留学生（学部生）にとっても、日本は単なる「憧れの国」ではないことが示されたといえる。

次に、【図4】[4-2]に示すとおり、大学院生では最も多かったのが『日本社会・日本人気質への違和感』で、次いで『日本社会・日本人気質への好意的理解』がほぼ同程度で多かった。肯定的な面として日本人の礼儀正しさや冷静さ、責任感の強さなどがあげられた一方で、過剰な気遣いや見えないルールの多さなどの否定的な面も述べられており、実際の日本人と接する度合いが増えることにより、肯定・否定ともにより多くのイメージを形成するようになることがうかがえる。同じ日本社会・日本人気質に対して、同一対象者の中でも肯定的イメージと否定的イメージが拮抗していることを示す結果といえる。日本社会への違和感の代表的な語りとしては、「みんなと一緒にしないと嫌われる感じで、なんか団体（重視）の感じ。台湾は逆です。個人の魅力を強調したい場合が多くて、個人の特別というか何かそういうものがあつたら強調するんですけど、日本はみんな一緒にしないとマイナスのイメージがする」というように、個人を大切に台湾と対照的に、日本では世間体を重視し集団に同調して行動することへの違和感がうかがえる。

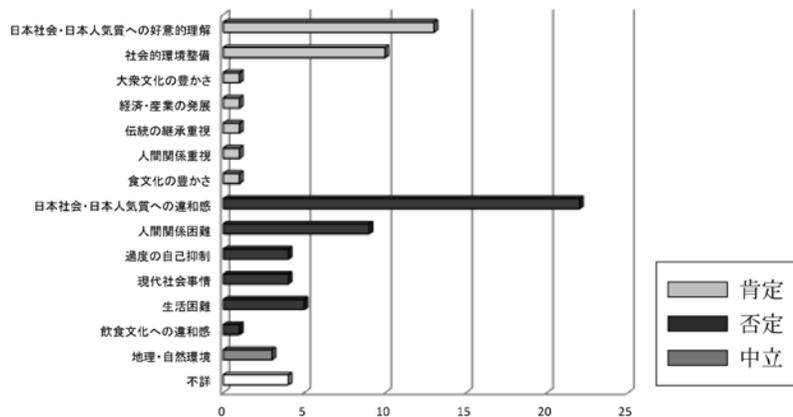
さらに、【図4】[4-3]のとおり、社会人ではさらに肯定的イメージは減少し、否定的イメージである『日本社会・日本人気質への違和感』が3群中、圧倒的に多数を占めた。実際に日本で働くことで、日本社会や日本人気質に日々接し、違和感を抱く場面が多いことがうかがえる結果である。「今の仕事は、特に台湾の関連会社のことでよく会社のトップと一緒に打ち合わせさせてもらったりとかするんですけど、『いやいや、そういうやり方はないだろう』って上の人言うんですけど。でも、『台湾では逆に日本のやり方は通用しないんですよ』って言うても、なかなかわかってもらえないところがあって、『日本はそういうやり方はない』って」というように、台湾の仕事のやり方を重視せず日本のやり方を会社の上司が通そうとすることが語られた。また、「やっぱり上下関係が厳しくて、たとえば何かの資料をまとめたものを、本当は早く見てほしいのに、相手も早く見たいだろうとは思んですけど…。ミスや誤りが多いと、『ちゃんとチェックしてる？』とか怒られてしまうので、『チェックチェック』って」という語りからは、会社の上司との意見の食い違いや、小さいミスにこだわる日本の会社の風土に葛藤を覚えている姿を垣間見ることができる。次いで多いのは肯定的イメージの『日本社会・日本人気質への好意的理解』と『社会的環境整備』となっており、日本人の丁寧さや堅実さ、住みやすさなどに対する言及は依然みられるものの、それ以外の肯定的カテゴリーはそれぞれ1例ずつしかなく、非常に少ない結果となった。また、「外国人だからか、それとも日本人同士でもそうなのかわかりませんが、浅い会話しかできません」とい



[4-1] 交換留学生(学部生)



[4-2] 大学院生



[4-3] 社会人

【図4】 3群のイメージ別比較 (カテゴリー)

うように、人間関係に関する表面的な関わりから否定的な語りが多くみられたのが特徴的である。

このように3.2.1の結果において、交換留学生（学部生）では肯定的イメージの割合が高く、社会人では否定的イメージの割合が高くなっており、肯定・否定の割合が逆転していることが示された。つまり、日本での所属や立場の違いによって、日本イメージに顕著な差異が生じていることが明らかになったといえる。さらに、3.2.2ではその差異について、3群の日本イメージをカテゴリー別に検討した。以上の結果をまとめると、まず、交換留学生（学部生）は肯定的イメージが多くみられたが、その中で特に日本の経済・産業や社会、文化に対して好意的であることが示された。その理由としては、滞り期間が短いため台湾で抱いていた日本への親日的なイメージを維持していることが考えられる。次に、大学院生は交換留学生（学部生）より肯定的イメージが少なく、否定的イメージが多いことが明らかになった。これは、「学年が上がると否定が増加する」という先行研究（加賀美・守谷・楊・堀切, 2013）とも一致する結果である。また、大学院生は交換留学生（学部生）よりも滞り期間が長いこと、実際の日本社会や日本人に触れる機会が多くなり、日本に対する多様な知識が増えていることも影響していることが推察される。さらに、社会人は3群中、否定的イメージが最も多かったが、中でも『日本社会・日本人気質への違和感』『人間関係困難』が多くみられたことから、職場や地域社会で生活していく上での本音のわかりにくさや上下関係の厳しさなどによる日本での人間関係構築の困難さを感じていることがうかがえる。

4. まとめと今後の課題

本研究は日本に在住する台湾出身日本語上級話者の日本イメージを検討し、さらに所属・立場別の差異を検討したものである。研究課題1の分析の結果、先行研究で示された台湾在住者に比べ、全体として日本に対して否定的イメージの頻度が高かった。このことは、日本での日常生活体験や人間関係に関する体験に基づいた現実の日本イメージと台湾で描いていた来日前の日本イメージとのギャップから生じるものであろう。また、台湾在住者より実際に日本に滞在している人は、日本社会に参入して日本人との直接的な接触頻度が増加し、日本を深く知るようになったため、否定的評価が高まることが考えられる。しかし、このことは日本の長所と短所の両方を認識し、日本に対する偏った肯定的理解だけにとどまることなく、真の意味での異文化理解が深まったといえるのではないかと考えられる。

さらに、本研究の研究課題2の所属・立場別の分析では、交換留学生（学部生）の肯定的日本イメージが最も高く、次いで大学院生であり、社会人の肯定的日本イメージが最も低かったことが示された。このことは、学部生より、大学院生、さらに社会人という立場のほうが、日本人との人間関係やコミュニケーションに深く関与せざるを得ない文脈や状況であるために、自己と日本人、あるいは台湾文化と日本文化の対比に向き合うことが不可避な状況に迫られた結果、違和感や葛藤が生じていると考えられる。葛藤とは「期待されていることが妨害されていると関係者が認知する状態のこと」（Thomas, 1976; 加賀美, 2007）であり、特に異文化接触では異文化間葛藤が起こりうる。異文化間葛藤では価値観や慣習の違いにより一方が適切と思って行う行動が他方にとっては我慢出来ないものと知覚される（加賀美, 2007）ことであり、本研究の対象者においても、来日後、異文化接触場面で日本人との人間関係やコミュニケーションスタイルなどの違いを認識し、日本人の行動規範への不可解さや人間関係困難など様々な異文化間葛藤が生じているといえる。

日本人就業者の外国人への葛藤や抵抗感について調査した徳永（2009）では、職場に外国人就業者がいる日本人の半数以上は抵抗感を感じており、その内容として最も多いのは「言語力」で、続いて「文化習

慣」「仕事の価値観」「仕事の進め方」の順で多いことが示されている。そのため、日本で就業する台湾出身者の日本イメージの理解は、日本人就業者との相互理解への働きかけの一助となる。

今後は、上述した結果を生かして、台湾の大学生や大学院生に対しては、大学キャンパスにおける留学生支援の中で日本理解を促進させるようなプログラムの作成をしていく必要があるだろう。指導教員や授業担当者、関係者に対しては、台湾の留学生の全体的特徴を理解してもらうような情報提供が必要であろう。それとともに、一人ひとりの特性や成育環境、日本での所属・立場や生活環境などの個別的な状況を勘案することも重要である。また、台湾出身の社会人に対しても、会社などの就業先や地域社会において、異文化理解の促進プログラムを実施することや、周りの日本人に対しても、日本人就業者と同様な行動を求められている可能性があるため、相互理解を促進するような働きかけが必要とされるであろう。

なお、本研究で参照した対象者へのインタビューデータからもうかがえるように、各対象者は来日後、日本社会のさまざまな面に接しており、所属・立場、滞り期間などの物理的な要因に加えて、「彼らが日本でどのような経験をしているのか」が、その日本イメージに影響する重要な観点であると考えられる。今後はインタビューデータをより詳細に分析し、さらなる検討を行う必要があると考えている。関連要因を付加して量的調査を行い年代別に検討する予定である。さらに、日本イメージ調査結果を大学の留学生支援や職場・地域社会の外国人支援にどのように活用していくかについても、実践的教育プログラムの作成など併せて広く検討したい。

【参考文献】

アジア大洋州局 (2014) 「最近の日台関係と台湾情勢」

www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/pdfs/kankei.pdf. 2014年7月26日閲覧

岩男寿美子・萩原滋 (1988) 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析—』 勁草書房。

加賀美常美代 (2007) 『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』 ナカニシヤ出版。

加賀美常美代・堀切友紀子・守谷智美・楊猛勳 (2013) 「日本への関心度と知識との関連からみる台湾の日本イメージの形成過程」 加賀美常美代編著『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか—韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』 明石書店, 136-154。

加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美 (2013) 「韓国の日本イメージの形成過程—九分割統合絵画法による分析」 加賀美常美代編著『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか—韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』 明石書店, 13-32。

加賀美常美代・守谷智美・岡村郁子・岩井朝乃・小松翠・岡村佳代・黄美蘭・田中詩子・西澤真奈未 (2013) 「東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージと関連要因」 異文化間教育学会第34回大会, 2013年6月, 異文化間教育学会, ケース/パネル発表。

加賀美常美代・守谷智美・楊猛勳・堀切友紀子 (2013) 「台湾の日本イメージの形成過程—九分割統合絵画法による分析」 加賀美常美代編著『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか—韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』 明石書店, 72-89。

甲斐ますみ (1995) 「台湾における新しい世代の中の日本語」 『日本語教育』 (85), 日本語教育学会, 135-150。

黄美蘭 (2013) 「アルバイト先における被差別感の原因帰属と間接的接触—中国人日本語学校生と私費留学生の比較—」 『コミュニティ心理学研究』 17(1), 日本コミュニティ心理学会, 63-66。

川喜田二郎 (1967) 『発想法—創造性開発のために』 中央公論社。

交流協会 (2013) 「台湾における対日世論調査」 [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/047B227FA5F660874649257B9700271600/\\$FILE/H24yoron.ri.pdf](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/047B227FA5F660874649257B9700271600/$FILE/H24yoron.ri.pdf) . 2014年7月26日閲覧

Kuhn, M. H. and McPartland, T.S. (1954) An empirical investigation of self-attitudes. American

Sociological Review, 19(1), 68-76.

李衣雲 (2013) 「台湾における日本恋愛ドラマと日本イメージの関係について」『マス・コミュニケーション研究』(69), 日本マス・コミュニケーション学会, 108-125.

劉志明 (1998) 『中国のマスメディアと日本イメージ』エピック.

毎日新聞 (2007) 「日中韓共同意識調査」

<http://ratio.sakura.ne.jp/archives/2007/09/26232400/>. 2014年11月11日閲覧

守谷智美・加賀美常美代・楊猛勲 (2013) 「家庭環境・大衆文化・歴史教育から探る台湾の日本イメージ形成の背景要因」加賀美常美代編著『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているかー韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』明石書店, 112-135.

日本学生支援機構 (2014) 「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html. 2014年7月20日閲覧

篠原信行 (2003) 「台湾の大学生の日本と日本語に関する意識とそのイメージ形成に影響を与える要因について」『日本語文芸研究』(4), 台湾日本語文芸研究學會, 117-137.

Thomas, K. W. (1976) Conflict and conflict management. In M. D. Dunnette (Ed.), *The Handbook of Industrial and Organizational Psychology*. Chicago, IL; Rand McNally.

徳永英子 (2009) 「日本人就業者と外国人就業者とのギャップは何かー仕事上での“抵抗感”から探るー」『Works Review』(4), リクルートワークス研究所, 34-47.

鄭玉善 (2010) 「中国人留学生の来日後の対日観とその要因ー名古屋大学在学中の留学生の調査に基づいてー」『ククロス：国際コミュニケーション論集』(7), 名古屋大学, 143-157.

【付記】 本研究は平成24年～26年度科学研究費補助金（基盤研究(C)研究代表者：加賀美常美代）「東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージ形成過程と関連要因」による成果報告の一部である。2013年6月に異文化間教育学会ケースパネルおよび2014年7月にお茶の水女子大学言語文化研究会で共同発表を行ったもの一部に更なる分析を加え、論文化したものである。本調査にご協力くださった皆様に感謝し、心よりお礼申し上げたい。